ミンタラ

アイヌ語で「広場」の意味

文 北原モコットゥナシ・瀧口夕美　絵 小笠原小夜

イペアンロー！（いただきます）

「ユク」シカ スープ、油、防寒着に

今回は、ユク（シカ）をしょうかいします。

「ユク」という言葉はもともと「獲物」という意味。アイヌ民族にとって、ユクは代表的な獲物でした。ユクは群れで行動しますが、アイヌの考えでは、ユクは天からどっさり下ろされるものです。ユクランケカムイ（シカを下ろす神）や、ユカッテカムイ（シカを出す神）がいて、天から人間界に骨や毛を降らせると、それがユクの群れに姿を変えるのです。

とるときは、ユクの通り道に木をたおしてせばめて、そこに仕かけ弓を置くなど、いつも同じ所を通る習性を利用しました。また、何人かで群れを追いつめ、高いがけから落としたり、雪ふかい場所や海などに追いこんだりして、動きをにぶらせて仕留めました。

ユクの骨つき肉をなたで切り分けてにこむオハウ（スープ）は、骨からだしが出てとてもおいしいです。肉や内臓は、火を通して食べるほか、生でも食べます。あぶらみで作る油は、オハウやご飯、おひたしにかけます。油は食べ物の味をまとめ、コクを出すのです。

皮は防寒着やくつ、敷物に。骨や角は、なべをいろりにつるす「ろかぎ」や、土をほる道具、マキリ（小刀）のさやなどに。すじは弓のつるや糸など、いろいろなものに使いました。

カンピソシ(本)人物伝

森竹竹市

森竹竹市は、1902年（明治35年）、胆振の白老村に生まれた詩人・歌人です。

３歳のとき、ニシン漁場などで働いていた父が亡くなり、母、祖母、姉と竹市の暮らしはきびしくなりました。当時、和人の子は第一小学校、アイヌ民族の子は第二小学校と分けられ、授業の内容や通う期間にも差がつけられていました。和人の子にからかわれて、よくケンカをしていた竹市は、校長先生から「腕力ではなく、学力で勝ちなさい」と教えられました。

13歳で小学校を卒業すると、ニシン漁をしたり、郵便配達人や白老駅の雑用係として働いたりしました。短歌や俳句もつくりはじめます。正式な駅員になろうとしましたが、試験科目は「地理、歴史、分数、そろばん」で、それを学校で習っていなかったことに、くやしさを感じました。

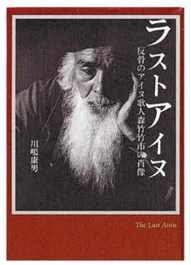
ラストアイヌ

川嶋　康男著

竹市は働きながら勉強し、苦労して試験に合格します。自分が受けた教育はまちがいだと考え、「ほんとうの（アイヌ民族の）保護とは、アイヌと和人を分けて教育するのでなく、その人の手をとり、目的地まで一緒に歩くことだ」という意見を書いて、新聞に送りました。

竹市は、母からアイヌの神話や物語を数多く聞いて育ち、それを若いアイヌのためにと記録しました。ウタリ（仲間）をはげます短歌などもたくさん書き残し、1967年に開館した白老民俗資料館の初代館長もつとめました。＜半生を自分で使ひし我命／残りをウタリに捧ぐ嬉しさ＞

（2020年　柏艪舎、1650円）



ニュースフムフム

「フムフム」はアイヌ語でのあいづち

木のふさかざり
広い世界 似ている文化

日本から西へ、約7800キロ。トルコとロシアの間にジョージアという国があります（昔はグルジアと呼ばれていました）。この遠い国から、大使として来ているティムラズ・レジャバさんは、ツイッターの人気者です。ジョージアや日本の文化、家族、政治など、話題はさまざま。私（北原）が注目したのは、昨年12月にしょうかいされたジョージア版のクリスマスツリー「チチラキ」です。

ジョージアでは、１月７日がクリスマスにあたります。クリスマスが近くなると、市場にチチラキがならびます。ヘーゼルナッツやクルミの枝をうすくけずって「ふさかざり」を作り、木の葉や木の実などでかざり付けをします。くるくるとよじれた白いリボンをたばねたような姿で、ツリーらしく、てっぺんに十字架がついているものもあります。

実は、このチチラキにそっくりなものがアイヌ文化にもあります。このコーナーにも何度か登場した「イナウ」です。チチラキの形は、特に、道北や樺太（サハリン）のイナウとよく似ています。

イナウは神様やご先祖様にお供えするものです。樺太でも北海道でもヤナギの枝をよく使い、おいのりの儀式をするときは、時季を問わずに作ります。お祭りで新しいイナウがならんだ様子は、とてもきれいです。

アイヌ文化とジョージア文化が似ているなんて不思議ですが、北海道とジョージアの間の地域にも、チチラキやイナウににたものがたくさんあります。インドやマレーシア、オーストラリア、ラオスに台湾、そして日本（和民族）にも。また、やはりチチラキにそっくりなものが、ヨーロッパにもあるのです。広いユーラシア大陸のはしからはしまで、文化がつながっているとしたらすごいですね。

きょうのことば

●イナウ

アイヌ民族のイナウは、形や大きさがいろいろ。お供えするカムイ（神様）や願いごと、地域によって、使うイナウが変わります。

作りたてのイナウはキラキラしてとてもきれいです。カムイの世界に届いたイナウは金や銀に変わり、カムイの宝物になると考えられてきました。

シャチのカムイは銅のイナウ（ハンノキで作ったもの）が好きだとか、ヒグマのカムイは銀のイナウ（ヤナギやミズキ）が好きだとか、カムイによって好みもあるといいます。

木のイナウは男性が作るものとされ、マキリ（小刀）を使っていろいろな形にけずり出します。材料は木だけではありません。女性が作るイナウは、布や木綿の糸などを使います。

きれいで貴重なものをカムイの世界に送り、お礼をしたいという気持ちから生まれた文化でしょう。

●いろいろな使われ方

本州や九州、四国のほとんどの地域でも、イナウににた「ケズリバナ」が作られます。１月15日前後の「小正月」や春と秋のお彼岸にかざるほか、お寺や神社の行事などで使われます。

北ヨーロッパのフィンランドでは、クリスマスに、十字架とイナウが一つになったようなものを作ります。ほかにも、聖水（きよめた水）にひたして、しずくをまき、あたりをきよめるなど、それぞれの土地の宗教や文化と結びついた、いろいろな使われ方があります。